埼玉親善大使レポート

氏名　盛永 維

留学先　イギリス　ロンドン

クラスの集合写真

TIMES 紙の撮影（The Wallace Collection にて）

■バレエ学校で学んだこと

昨年の９月、私はイングリッシュ・ナショナル・バレエ・スクール（ENBS）に入学しました。この１年間で、バレエの基礎を学び直し、様々な分野の踊りの成り立ちや時代背景などについても勉強しました。

日本ではできない貴重な経験も多く、病院を慰問してバレエを披露したり、美術館で一般の観客の前で踊ったりする機会もありました。患者さんから「またバレエが観られて嬉しい」と喜ばれると、もっと上手になって満足させたいと思いました。

美術館の公演では、美術大学の生徒とセッションして、彼らが作った衣装を纏い、展示されている芸術作品からインスピレーションを受けて創作した踊りを披露しました。衣装が作品のイメージに合っているか、イメージ通りでも踊りの動きを妨げないかなど意見を出し合いながら作品を作り上げる過程は刺激的で面白く、表現者としての役割の重みを学ぶ貴重な機会でした。

また、夏の公演では、ゲストの振付家を招いて指導を受け、ロイヤルオペラハウスの小ホールで行いました。長い期間、クラスで一つの作品を作り上げる過程で、チームワークや責任感といったプロになるために大切な経験をしました。学校外の先生が指導し、配役も決めるため、緊張感やクラス内での競争意識も生まれました。同じ志を持って練習に励む仲間がいることの恵まれた環境を改めて実感しました。

さらに、ロイヤルオペラハウスの公演では、プロダンサーたちが使っているリハーサル室で練習することもできました。YouTube やテレビで憧れていた場所で公演を行うことができ、とても貴重な経験となりました。

美術館を貸し切っての公演や歴史ある劇場での公演は、学生であってもほとんどが有料公演でした。このような経験ができたのは、バレエという芸術が一般の人々にとって身近なエンターテインメントとして根付いているヨーロッパだからこそだと思います。

夏公演（Royal Opera House にて）

冬公演でソロを踊る

アカデミックの授業でもバレエに必要な知識を得ることができました。バレエの歴史や学校の専属ピアニストから学ぶ音楽の授業、ベネッシュノーテーションという踊りを音楽の楽譜のように書く授業もありました。さらに、著名なバレエダンサーを招いての講義や解割学、栄養学などの授業を受けることができました。

その中でも、私が最も興味を持ったのはベネッシュノーテーションの授業です。ベネッシュノーテーションとは、楽譜のような五線に頭、肩、腰、膝、足の記号を書き、四肢の向きや曲げ方などを表すものです。音楽の種類やカウント、ステップの移動などについても細かく表記の仕方が決められており、ノーテーションを見ただけで、どのような振付けかが分かるようになっています。

ベネッシュノーテーションの授業では、学年末に筆記試験と実技試験がありました。筆

記試験ではノーテーションを読んで、どのような動きかを答えたり、逆にステップを言われてノーテーションを自分で書いたりする試験がありました。実技試験では、ステップの書いてある紙を読んで、実際にカウントや手の通り道などにも細かく注意を払いながら踊り、それを審査されました。

どのような動きかを文章で答える試験は、英語が堪能でない私にとって大変難しく、知っている表現を使いながら一生懸命説明しました。また、私の先生は、ライモンダという 2 時間以上のバレエの演目をすべてベネッシュノーテーションで書いたという経歴がある優秀な指導者で、英語が母国語でない私にも丁寧に分かりやすく教えてくれました。彼は日本が好きで、自分の名前とかけた“Edo”と書いてある T シャツもよく着ていました。身近な人が日本に興味を持ってくれていることは、とてもうれしく、誇らしいことです。

バレエの歴史やバレエの作品の特徴を学ぶ授業では、バレエを踊るために役立つ知識を多く学びました。踊りの授業では、歴史の授業で学んだバレエ作品の中に出てくる踊りを練習しました。ストーリーや演目の特徴を詳しく学んでから踊りを習うので、アカデミックの授業をバレエの授業に生かすことができました。

歴史の授業の中で最も印象的だったのは、クラシックバレエが生まれた時代背景についてです。クラシックバレエは王室と結びつきが強く、今では一般の観客がバレエを楽しむヨーロッパでも、当初の観客のほとんどは王室関係者でした。そのため、作品のストー

リーも庶民に焦点を当てたロマンチックバレエとは異なり、プリンセスが主人公の眠れる森の美女や白鳥の湖などの作品が生まれました。

また、王族や貴族に階級があるように、バレエ団の中でもダンサーたちの中でも、主役を踊るトップダンサー、ソロを踊るソロダンサー、そして大人数で踊るバックダンサーという階級が生まれました。宮廷の付属品としてつくられたクラシックバレエは、王室の影響を大きく受け、王族を楽しませるために生まれた豪華絢爛なバレエへと発展していきました。バレエの発展を歴史と共に学ぶことで、バレエの奥深さを理解することができました。

クラシックバレエには、ジェスチャーで感情やストーリーを表現するマイムというものがあります。授業では、映像資料を使いながら、一つ一つのマイムに込められた意味を学びました。バレエの始まりを知ることは、バレエを踊る上でもバレエを観る上でもとても重要なものだと改めて感じる良い経験になりました。

このマイムという動きは、バレエが国境を越えて愛される大きな理由の一つだと思います。ミュージカルやお芝居には言葉の壁がありますが、バレエは体でストーリーや感情を表現します。言葉の壁がないことは、バレエのすばらしさを、日本をはじめとする世界中の人々に広めるための重要なポイントだと思っています。

■ロンドンでの生活

私の学校はチェルシーという街にあります。チェルシーは上品でおしゃれな賑わいのある素敵な街です。学校から徒歩 20 分ほどのところにある学生寮で、イタリア人のクラスメイトとルームシェアをしながら新生活を始めました。ロンドンの一般的な学生寮は、部屋にトイレとシャワーがついており、キッチンは共同というのがほとんどです。そして、居住スペースはとても狭いです。私の部屋は二人部屋でしたから、さらに狭く、机と二段ベッドで部屋はいっぱいでした。机とベッドの間が唯一のスペースですが、人ひとりが通る幅しかありませんでした。

プライベートなスペースがない中で、英語も話せず、ルームメイトにイライラしたり、ホームシックになったりしていました。それでも一緒に過ごしていくうちに、自分の意思をはっきり示す外国人の彼女の前では、自分の考えをオープンに話せるようになっていることに気づきました。新しい自分に気づいた時には少し驚きました。

一方で、ルームメイトも自分のエリアに踏み込み過ぎない日本人の国民性が心地よかったのか、来年もシェアしないか、休みにイタリアの家に来ないかと誘ってくれました。そうした態度から、自分との暮らしを前向きに捉えてくれていると分かると、イライラしていた気持ちも落ち着き、彼女たちの明るくてフレンドリーな国民性を素直に受け入れられるようになりました。

また、海外の文化にもたくさん触れる機会がありました。クラスメイトの誕生日にはケ

ーキを作ってピクニックに行ったり、学期末の試験が終わると寮でパーティーをしたりしました。私は、パーティーやピクニックになじみがなかったので、外国の文化を体験できると楽しみにしていたのですが、音楽をかけて歌ったり、踊ったりしているだけの集まりを楽しいと思えず、これならバレエの練習をした方がいいと感じていました。しかし、せっかく外国にきたのに、自分から心を閉ざすのは良くないと思い直し、とにかく参加するようにしました。そう思わせてくれたのは、ルームメイトのお陰かもしれません。グループでの会話にも少しずつ参加できるようになり、ダンスを楽しむ気持ちにも余裕が生まれるようになりました。

クラスメイトとハイドパークで

私の心が躍ったのは、ヨーロッパのクリスマス文化です。クリスマスが近くなると、ロンドンの街は飾り付けられ、クリスマスマーケットがいろいろなところで開かれます。私はその華やか雰囲気にわくわくしいろいろなマーケットを見に行きました。コベントガーデンでは、大きなツリーだけでなく、建物の中では、大きなオーナメントが天井にも飾りつけられ、街中がクリスマスデコレーションされていました。日本以上にクリスマスが大切な行事とし、ヨーロッパの人々が楽しんでいることを目の当たりにしました。

コベントガーデンのクリスマスツリー

ロンドンでは、バレエ以外にもたくさんの芸術に触れる機会がありました。イギリスの学校は、日本に比べると休暇が多いので、そうしたお休みを利用してたくさんの場所に足を運ぶことができました。私の住むチェルシーには大きな美術館があり、そこでは絵

画や銅像、王族のジュエルなどたくさんのアートを見ることができました。以前 2 週間ほどお世話になったホストファミリーに美術館を案内していただいたこともありました。彼女は、美術の勉強をしていた時期があり、歴史的背景や画家のおかれていた境遇などを詳しく解説してくれたので、とても興味深く絵を楽しむことができ、バレエ以外の芸術に興味を持つきっかけをもらいました。ロンドンには、まだまだ行きたい美術館や博物館があります。

ビックベンの前で

また、イースター休暇にはオペラ座の怪人のミュージカルを観に行きました。以前からミュージカルは好きでしたが、ロンドンで観るのは初めてでした。豪華なセットや衣装、俳優たちの歌唱力、演技力に圧倒され、バレエとは違う刺激を得ることができました。バレエの公演は 1 年で 15 公演以上鑑賞する機会がありました。イギリスの一流バレエ団

である英国ロイヤルバレエ団やイングリッシュ・ナショナル・バレエ団の公演はもちろん、学校の授業の一環でリハーサルを観る機会も得ました。そして、伝統的なロイヤルオペラハウスやロイヤルアルバートホールにも訪れることができました。

ロイヤルオペラハウスには、その日行われる作品の衣装が展示され、オペラハウスの歴史を語るたくさんの写真や絵が並んでいました。その中には、日本の着物を着た絵もありました。日本の文化がイギリスでも認められているような気がして、とてもうれしくなりました。また、ロイヤルオペラハウスでの公演では、チャールズ国王と同じ公演を観る機会がありました。国王がいらっしゃるとアナウンスが入り、観客たちが立ち上がって拍手をしました。とても不思議な気分でしたが、イギリスに来たと実感する瞬間でした。

バレエショップでお買い物

Royal Opera House

一方、ロイヤルアルバートホールにも過去に演奏したアーティストやアスリートの写真が並べられていました。ロイヤルアルバートホールは、大きな円形の舞台で知られています。そのため、私が観た白鳥の湖の舞台は、全方向から楽しめる新しい演出になっており、とても新鮮で印象的でした。プロのダンサーを生の舞台で観るというのは、とても勉強になりますし、バレエの道を志すうえで良いモチベーションにもなりました。

そして、海外と日本のつながりについて実感する機会や、イギリスならではの考え方を知る機会もたくさんありました。

ロンドンには、丸亀製麺や一風堂などの有名なチェーン店はもちろん、イギリス独自の日本食のレストランもたくさんあります。クラスメイトと食事に行くときは、必ず日本食が候補に出ますし、ランチにスーパーでお寿司を買ってくる人も多いです。スーパーには必ず日本食のコーナーがあり、寿司はもちろん唐揚げやカツカレー、みそやしょうゆなどの調味料もあります。イギリスでは、カツが入っていなくてもカツカレーと呼ぶそうです。

日本食が人気ということは知っていましたが、これほどまでに身近になっているとは思っていませんでした。そして、食を通して日本に興味を持ってくれている人が多くいると知って、とてもうれしく、誇らしい気持ちになりました。

ルームメイトとバスでユニクロの店の前を通った時に「このブランド好きなの」というので、冬休みに帰国した際にフリースをお土産に買っていきました。すると、大喜びし

て、毎日寮で着てくれました。品質の良い日本の製品はやはり海外でも注目されているようです。

また、彼女はイタリア人なので日本のポテトチップスのピザ味を買っていくと、面白いと言って喜んで食べてくれました。イタリアは日本と同様に食についての関心が高い国なので、日本のユニークな発想に興味を持ってくれたようです。

公演リハーサルの帰り道

■１年間の留学を終えて

留学先で出会った人たちは、みんな日本の文化に興味を持っていました。私の学生寮には、いろいろな国から来た学生が暮らしており、共同のキッチンで日本のアニメや映画を観ている場面は何度も見ましたし、近くの本屋さんにも日本の漫画がたくさん置いてありました。このように、漫画やアニメが世界中に広まっているのは、単に漫画やアニメが面白いからだけでなく、彼らが漫画やアニメを通して、日本の暮らしや文化に興味を

持つからだと思います。

京都や東京に訪れる外国人観光客はたくさんいますが、私は、海外から友人を招いて、日本の生活や文化を紹介し、体験してもらいたいと思います。日本を感じてもらい、大好きな日本を知ってもらうことが私のできることだと思いました。温泉旅館に泊まったり、有名な観光地を訪れたりするのも日本の良さを知る素晴らしい経験になると思いますが、彼らの求めている、日本人のリアルな生活を体験してもらいたいのです。私は、これからも外国人の友達をたくさん作って、私の街埼玉に招待し、埼玉の魅力を伝えたいと思います。

今までの生活を振り返ってみると、両親やバレエの先生をはじめ、どれだけたくさんの人に助けてもらってきたのだろうと感謝の気持ちでいっぱいになります。そして、この留学のために、夢を叶えるために、埼玉世界行きと出会えたこと、ご支援をいただきました企業様に出会えたことは本当に幸運だったと思いっています。

私はロンドンにあと２年留学します。これからも、支えてくだっている方たちに感謝の気持ちを忘れず、精進していきます。この度は誠にありがとうございました。